

あたしの京都

鴨川—川端通り

河野裕子

鴨川沿いの川端通りは週に何度か車で通る。

京大病院への通院と水泳のために踏水会に通っているからである。北西から流れてきた加茂川（賀茂川説もある）と北東から流れてきた高野川は出町柳のあたりで合流してデルタをつくっている。この合流点より下流を鴨川と呼んでいる。わたしが車で走るコースは鴨川と高野川沿いのコースなのだが、幾つもの橋が架かっている、橋の名前をチラチラと見ながら走るのが楽しみのひとつである。この機会に、もうすこし正確にと思って地図でしらべてみた。

高野川に架かっている橋は、下流にむかって花園橋、蓼倉橋、御蔭橋、河合橋など。加

茂川のほうは、御園橋、出雲路橋、葵橋、出町橋等々。どちらの川の橋の名も実に趣がある。

こんな名前の橋を渡ったり傍を通ることができただけでも京都に住めて仕合わせだと思ふ。

鴨川には賀茂大橋や荒神橋が架かっているこれも面白い。荒神とは龍の神様の意味だそうだ。橋を渡って河原町を越えたところに、節分会で有名な清荒神があるから、名前の由来はそこから来ているのだろう。

橋もいいが、川端通りを走っていて一番たのしいのは、出町柳にさしかかった時である。名前のとおり、何本かの柳の木の枝が風にそよいでいる風情はなかなかのもの。京大や同志社大が近くにあるため、学生がひっきりな

しに歩いていて、彼らを眺めているだけで若やいだ弾んだ気持ちになる。

川端通りには桜並木が続いていて、花の季節にここを走ると頭がくらくらしてしまう。

対岸にも桜が咲く。何年か前のことになるが、家族で桜見物をしながら車で走っていた。あれは高野のあたりだっただろうか。不意に永田（夫）が車を停めて、散りたまった桜のはなびらを両手で掬って集め始めた。何してんのと聞くと、桜の枕を作るんやという。今から考えると可笑なことだが、その時はわたしも子供も一緒になってせっせと桜を集めた。桜の花には夜も昼も人のところを狂わせるものがあるのは確かだ。わたしたちのほかにも、

桜枕を作った人は必ずいるに違いないと思う。今は桜の季節ではなく、鴨川には数えきれないくらいユリカモメが飛んでいる。数十羽単位でひとつの群れをなしており、いっせいに方向を変えるときはハッと息をのむような鮮やかな色彩の変化を見せる。白い羽が翻りながら一瞬、灰色に翳る。かと思うまにまた白いやわらかな背に陽を受けて、大きな楕円のようなかたちに戻ってゆく。いつまで見ても飽きない。

水に浮いている時もいい。何羽も何羽も同じ形の白いまるいユリカモメが、鴨川の水が続きかぎり浮いている。眺めていると、やさしい平和な気持になる。

鴨川には水鳥が多く、わたしは鳥には詳しくはないのだが、ユリカモメのほかに、アオ

サギ、カモ、オオサギ、セキレイを見分けることができる。トビも見かける。ユリカモメの群れに交じって飛んでいるのだが、先日見たときは、二十羽ほどがゆったりと大きな輪を描いていて、こんな街なかに何故こんなにいるのだろうかと思議に思った。

川端通りは、この十数年来、わたしにとって暮らしの道のように馴染みのある通りになってしまった。おりふしの思いを味わい味わい通るのだが、一度だけ泣きながら帰ったことがある。一昨年の秋、左胸に卵ほどの大きさのしこりが二つ、三つあるのに気がついた。きらくな気持で京大病院に行ったのだが、即座に悪性だといわれた。ふたりの医師に胸を見おろされながら、冷静というか、のん気というか、わたしは「リンパ節に引っ越した

のですね」と言った。あとから考えると、転移ということばを使いたくなかったのだろう。診察室の背もたれのない椅子に腰掛けて医師の説明を聞いている間も、他人事のようにだつた。事態が分かりかけてきたのは、病院を出て、道で永田と会ってからである。彼は担当の医師から連絡を受けてやって来たのだつた。

何といふ顔してわれを見るものか私は
ここよ吊り橋じやない

荒神橋、出町柳、葵橋、橋美しよ学生
たちみんな誰も、泣きつつ帰る

「歌壇」(平成十二年十二月号)

この世のことが遠ざかっていくようだった。遠ざかりながら鮮明にくっきりと美しく見えた。この世の残り時間はどれだけあるのだろう。わたしはわたしの身体だけだった。

術後一年余りがたったが、泣きながら帰った日のことを、川端通りを通る度に意識の底で反芻していることに気づく。人生はひとつづきの時間の流れにはちがいないが、病気をするまでのわたしは、今のわたしとは質的に違う時間のなかに居たような気がする。